

## 『源氏物語』における垣間見の研究

——敬語表現の消失に着目して——

佐藤光

はじめに

平安貴族たちの恋愛を描いた『源氏物語』の印象的な場面の一つに、「垣間見」がある。女性が男性に顔を晒すことが日常的ではなかった当時、男性が女性を覗き見る垣間見という行為は、男女の恋愛関係の発展において重要な役割を果たしていたと考えられる。しかし、その一方で、無視できない点も存在する。それは、垣間見場面において、たびたび敬語表現の消失が見られるという点である。

登場人物の大部分が貴族である以上、光源氏をはじめとする作中の主要な人物たちは、敬語表現をもって語られることが一般的だ。この敬語表現とは、地の文に表記される語り手から光源氏などの登場人物に対する敬意である。当時の文学は位の高い登場人物に関する事柄が敬語表現を用いた文体で書かれることが常であった。たとえば、光源氏が何かを視界に捉えたとき、地の文は光源氏がそれを「見給ふ」のように表記し、敬語表現を用いてその行動や考えを記していくのが、当時の物語文学における一般的な文体だったのである。しかし、垣間見場面では、本来なら覗き見ている男性に対して使われるべき敬語表現が見当たらない箇所が少なくない。先にあげた「見給ふ」ならば、「見る」のように、敬語表現を用いずに記述されているのである。この現象は、垣間見場面の重要性を考慮すれば、単なる文法間違いとして処理できるものではない。垣間見という行為が恋物語で重要な要素を担うからこそ、そこに何らかの効果が生まれることを期待して、意図的に敬語表現が削除されたのだと考えることができる。

わざわざ通常の文法表現を崩してまで、垣間見に盛り込まれた作者の意図とは何なのか。また、敬語表現の消失は垣間見場面にどのような影響・効果をもたらしているのか。本論文では、それらの疑問点を明らかにし、『源氏物語』における垣間見の特徴を考察していく。

### 一 垣間見とは何か

先の通り、垣間見とは、平安時代の貴族たちの中で用いられていた、恋愛を発展させるための手段の一つである。三谷邦明氏は、著書の中で、上流階層の女性が男性に顔を見せないという習俗は律令制度が確立してからのものと想定でき、物語文学が成立する時代には既に貴族社会で確立していたと語っている<sup>(準)</sup>。さらに、垣間見と物語文学における恋愛についての深い関連性を認め、当時の一代記的な物語文学では垣間見を描かないテクストを探すができないほどであり、垣間見は物語文学を貫くモチーフであるとしている<sup>(準)</sup>。また、『鑑賞と基礎知識』の「垣間見の様式」の項では、覗き見る方と見られる方の性別の組み合わせによって四通りのパターンが想定されることに言及しつつ、『源氏物語』は男が女を見る場合の恋物語の展開において、垣間見を様式にまで高めたとしている。このように、垣間見は当時の貴族社会では一般的な習慣であったと同時に、当時の物語文学においても、恋物語の定番的要素として受け入れられていたと考えられる。

その一方で、吉海直人氏は垣間見と恋物語展開の関係性を一般的な意見であると認めつつ、『伊勢物語』初段のように垣間見場面だけで終結・閉塞してしまっている例をあげ、必ずしも垣間見が恋物語展開に関係するものではないと主張している<sup>(準)</sup>。確かに、男が女はらから垣間見る『伊勢物語』の初段は、その後の恋愛展開を想像することはできても、その場面だけで恋愛関係に至っていると言うことはできない。他にも、たとえば『竹取物語』には美しいと評判のかぐや姫を数多くの男たちが垣間見る場面が登場するが、かぐや姫と男たちが恋愛的に心を通わせることはしない。『狭衣物語』では狭衣大將が婚約相手である女二宮を垣間見して、それをきっかけに関係を持ってしまう場面が描かれるが、女

二宮が狭衣大将を拒絶したことにより、二人の恋はそれ以上の展開を見せない。以上のような例もあり、垣間見場面だけで男女二人が恋愛関係を持つことや、その後も二人の恋愛関係が続き何かしらの展開を見せるものは、吉海氏の主張通り、すべてとは言い切れないようだ。

しかし、垣間見が当時の貴族社会で受け入れられた一般的な習俗であることや、恋物語を取り扱う物語文学に多く登場していることを鑑みると、少なくとも物語上における垣間見は、恋愛展開を予期させるものであったと捉えることはできるだろう。物語上に垣間見場面が登場するとき、読者は垣間見る男性と垣間見られる女性の間に何らかの恋愛的展開があることを期待する。そのような恋物語を予想させる伏線として、垣間見は機能しているのである。

## 二 『源氏物語』における垣間見

このように、その後が続く恋愛展開を読者に想像させる布石としての役割を持つと考えられる垣間見であるが、『源氏物語』の場合もそれは同様である。このことについて、いくつかの典型的な場面と例外を取り上げて説明する。まず、若紫巻には、以下のような場面が登場する。

〔A〕 きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ、中に十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなへたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生い先見えてうつくしげなるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうにゆらくとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何事をや。童べと腹立ち給へるか」とて尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるどころあれば、子なめりと見給。「雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」とていとくちおしと思へり。このあたる大人、「例の心なしの、かゝるわざをしてさいなまる、こそいと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとおかしうやうくなりつるものを、烏などもこそ見つけれ」とて立ちてゆく。髪ゆる、かにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるはこの子の後見なるべし。

(若紫巻(一)一五七)

この㊦の場面は、光源氏が後の紫の上・若紫をはじめて垣間見た場面であり、光源氏から見た若紫の容貌や様子が描写される。少なくともこの時点では、光源氏は若紫を恋愛対象としては見ていない。しかし、光源氏はこの垣間見によつて、若紫が自身にとつて忘れられない存在である藤壺によく似ていることに気付く。恋愛展開を予想させる行為である垣間見を通し、叶わぬ恋の相手である藤壺によく似た少女を見出すことは、作中の光源氏が若紫を恋愛対象として見なしていないにも関わらず、読者に彼女が光源氏の恋の相手になることを予測させる効果があると考えられる。

次に取りあげるのは末摘花巻だ。この巻に登場するのは正確には垣間見ではなく「垣間聞き」とでもすべきものであり、垣間見とは微妙に異なる形の行為だが、後述する内容に関わるため、この場では類する行為の一つとして取りあげておく。以下は末摘花の評判を聞いた光源氏が彼女の元を訪れ、彼女の弾く琴の音色を聞く場面である。

㊧ ほのかに掻き鳴らし給ふ、おかしう聞こゆ。なにばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるものなれば、聞きにく、もおほされず。いといたう荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすへたりけむなごりなく、いかに思ほし残す事なからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなる事どももありけれ、など思ひつづけても、物や言ひ寄らましとおほせど、うちつけにやおほさむと心はづかしくて、やすらひ給。

(末摘花巻㊦二〇七)

㊨の場面では、元々評判を聞いて訪れたということもあり、光源氏は完全に末摘花を恋愛対象として認識している。この垣間聞きで彼女への興味が深まった光源氏は彼女と結ばれるものの、実際に末摘花の顔を見て幻滅してしまう。垣間見に類する垣間聞きで読者に恋愛を予測させたうえで、末摘花が実は醜い顔立ちだったという一種の「オチ」でその期待を裏切るといふ構成が用いられている。

続いて、野分巻の垣間見である。この巻で描かれるのは、光源氏と葵の上の息子である夕霧による、紫の上の垣間見だ。

㊩ 御屏風も、風のいたく吹きければ、をし畳み寄せたるに、見とをしあらはなる廂の御座にあ給へる人、ものに紛るべくもあらず、け高きよらに、さとにはふ心ちして、春のあけぼの霞の間より、おもしろき榊桜の咲き乱れた

るを見る心ちす。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、あい行はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。御簾の吹き上げらるゝを、人々をさへて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いといみじく見ゆ。花どもを心ぐるしがりて、え見捨てて入り給はず。御前なる人とも、さまざまにものきよげなる姿どもは見たさるれど、目移るべくもあらず。

(野分卷(三三七))

葵の上は夕霧を産んですぐ亡くなつており、夕霧は養母の花散里以外の光源氏の妻たちとは親しく会うことができなかった。これは、光源氏が藤壺に叶わぬ恋をし、過ちを犯してしまつた経験から、夕霧に同じ道を辿らせまいとしたためである。夕霧の生真面目な性格が幸いし、彼が光源氏と同じ道を辿ることはなかったが、㊦の垣間見は読者に光源氏と夕霧の姿を重ねさせるものとなつている。垣間見を通して光源氏の経験の投影がなされることにより、より強く恋愛展開を期待・予期させる場面であると言えるだろう。

最後に取りあげるのは、浮舟巻の匂宮の垣間見である。以下は、匂宮が浮舟を垣間見て彼女を見初める場面である。㊧ やをらのほりて、格子の隙あるを見つけて寄り給に、伊予簾はさら／＼と鳴るもつゝまし。新しうきよげに造りたれど、さすがにあら／＼しくて隙ありけるを、誰かは来て見むともうちとけて穴も塞がず、き丁のかたびらうちかけてをしやりたり。火明かうともして、もの縫ふ人三四人あたり。童のおかしげなる、糸をぞよる。これが顔、まづかの火影に見給しそれなり。うちつけ目かとなを疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君は腕を枕にて、火をながめたるまみ、髪のコぼれか、りたる額つき、いとあてやかにまめきて、対の御方にいとようおぼえたり。

(浮舟巻(五二〇〇))

浮舟を見初めた匂宮は薫になりすまし彼女と一晚を共に過ごし、浮舟は二人の男性の間で揺れ動くこととなる。いわば「三角関係」の構図である。㊨の匂宮による浮舟の垣間見からは、垣間見を起点に二人の恋愛展開がはじまることに加えて、薫も含む三角関係のはじまりを予測することができる。

このように、『源氏物語』においても、垣間見はその後の恋物語を読者に予測させる伏線としての効果を持つている。『鑑賞と基礎知識』の言葉を借りるならば、恋物語の伏線としての役割は、それ自体が一つの型である「様式」として

昇華され、垣間見場面がある時、結ばれるか結ばれないかはともかくとして、その後には何らかの形で男女の恋愛関係が描かれるという確固たるイメージを読者に抱かせるのである。垣間見が当時の恋物語において、ただ挿入される現象以上の重要な働きを持っていたことは、疑いようもないと思われる。

### 三 垣間見場面での敬語消失

平安文学、および『源氏物語』に関する垣間見を整理したところで、いよいよ垣間見場面での敬語表現の消失の問題に触れていきたいと思う。はじめに、『源氏物語』の地の文について言及したい。三谷氏は地の文について、登場人物や情景などの「物語の内容」を語り手の言葉として再現・置換・生成したものであり、言説化されたあらゆる出来事は語り手という主体を通過することなしに生成しないと述べている。<sup>(注4)</sup>ここに登場する「語り手」とは、地の文を語っている存在である。『源氏物語』は、光源氏などの登場人物ではなく、語り手という存在によって語られた、現代で言うところの三人称小説に近いものだ。『源氏物語』に限らず、平安文学がこのような三人称的な形で物語られていたことは、他の平安期の文学作品を見れば明らかであり、当時の物語文学の基本形態であったと言っていいたいだろう。また、三谷氏は平安期の敬語表現について、以下のように述べている。<sup>(注5)</sup>

古代後期の社会は階級・階層意識の強い社会であり、敬語なしに生活することなどは不可能であった。そうした世界の中で、尊大語・軽卑語・美化語・最高敬語・絶対敬語・自尊敬語などがあるものの、原則として一人称には敬語が使用されていない。つまり、敬語不在の言説を、一人称的に読んでしまう社会規範が平安朝にはあったのである。

以上の点を踏まえ、『源氏物語』の敬語表現の消失に関する先行研究をまとめていく。

最初に、島津久基氏の著作中の文章に注目してみたい。氏は「思ふ」という語が「思へり」のような使われ方している場面をいくつか取りあげ、これを主語である人物の心意をそのまま客観的叙述に移用している、客観的移用や主観

直叙とでも呼びたいようなものだとしている。<sup>(主6)</sup>この指摘は、敬語消失について直接的に語っている訳ではないが、登場人物の主観的な感覚が地の文に表出することについて認め、言及していると言えるだろう。

次に、向井克胤氏は、『源氏物語』では作者の筆が「地」の文から「心」の文に移り登場人物の心に入ってその動きを叙述しており、垣間見中の光源氏の目に視点を定着させ、光源氏が見、感じるままに描写しているという考えを主張している。<sup>(主7)</sup>また、三谷氏は、先の引用部分と同様、古代後期の貴族社会では階層意識の強さゆえに敬語なしに生活することはできないことを指摘し、敬語不在の言説は規範的に一人称として同化的に受容してしまい、敬語不在の文章を一人称現在の体験として読み取ってしまうと語っている。<sup>(主8)</sup>さらに、石坂晶子氏は、本論の二節で引用した若紫巻の垣間見を例にあげ、光源氏への敬語が消失している時、光源氏と語り手の間は完全に密着しており、読者は語り手の介在なしに光源氏の心と直接向き合うことができると述べている。<sup>(主9)</sup>

このように、垣間見と敬語表現の消失について論じている先行研究では、『源氏物語』の地の文を語る「語り手」の存在が重要視されているようだ。そして、語り手と登場人物の視点の距離感が読者の視点にも影響を及ぼしている、という見方がされているように思う。これらの意見を踏まえ、実際に『源氏物語』の垣間見場面を取りあげながら、先行研究で指摘されている点について、詳しく分析していく。

まず、二節で引用した若紫巻の垣間見の敬語消失について見てみよう。重ねて引用することはしないが、□の場面は光源氏が若紫を垣間見る場面であり、当時の社会規範によれば光源氏には敬語が使われて然るべきである。実際に、この場面にも「子なめりと見給」のように、光源氏に対する敬語表現は見られる。しかし、敬語表現が抜け落ちている文章があることは一目瞭然だろう。その例として、「めやすき人なめり」と「この子の後見なるべし」という二つの文に注目していく。

「めやすき人なめり」の「なめり」は、断定の助動詞「なり」の連体形と推定の助動詞「めり」からなる「なるめり」の撥音便無表記というように品詞分解できる。そしてこの文を現代語訳すると、「感じが良い人のようである」となる。次に「この子の後見なるべし」は、同じく品詞分解すると、「なるべし」は断定の助動詞「なり」の連体形と推量の助

動詞「べし」の終止形の組み合わせとなる。現代語訳は「この子の世話役なのだろう」である。これらの表現は、どちらも光源氏から少納言の乳母に向けたものであり、光源氏は彼女を「めやすき人なめり（感じが良い人のようである）」と感じ、「この子の後見なるべし（この子の世話役なのだろう）」と推測したということだ。しかし、品詞分解から分かるように、光源氏がそう感じた、そう推測した事柄にも関わらず、これらの表現には敬語表現が使われていない。先にあげた「子なめりと見給」などの敬語表現を含む当時の文法として正しい文章も成り立つため、この敬語表現の消失は特異な現象であると言えるだろう。

ここで一旦、先程の先行研究に立ち返ってみる。先行研究に共通するのは垣間見ている男性（この場合は光源氏）と読者の「距離の近さ」の重要視である。私自身も、それらの意見と同様の考えである。敬語表現が消失している時、私たち読者は、本来であれば語り手が語る三人称のように展開される地の文を、一人称として読んでいく。もちろん現代の感覚では敬語表現と人称の問題は必ずしも結び付くものではないが、三谷氏の指摘通り、敬語不在の文章を一人称的に読んでしまう社会規範が平安当時にあったのだと考えれば、「めやすき人なめり」「この子の後見なるべし」は当時の読者に一人称的に読まれていたのだと推測できる。読者は光源氏たち登場人物を語り手を通して外側から見るのではなく、彼らと同じ位置に立ち、彼らと視線を同化させ、彼らが垣間見ている光景と限りなく同一のものを感じ取っているのである。

以下の考察を踏まえたいうえで、二節で引用した他の場面についても見ていこう。まず④の末摘花巻の垣間聞きである。「おかしう聞こゆ」の「聞こゆ」は、ヤ行下二段活用終止形の自動詞であり、「(琴の音色が) 風情があるように聞こえる」と現代語訳できる。光源氏が感じたことにも関わらず敬語が消失しており、読者と光源氏の感覚の同化が起こっている。なお、垣間聞きは垣間見とは異なる行為であるが、敬語表現の消失により読者に三人称の体験を一人称的に読ませるという意味では同一であるため、本論文ではその点に関してのみ垣間見と同じ事象として扱うものとする。

続いて、⑤の野分巻の垣間見である。「見る心ちす」の「す」はサ行変格活用の動詞の終止形であり、「見る感じがす」と現代語訳できる。「目移るべくもあらず」は「べくもあらず」が「…はずがない」などの意味を表す連語である

ため、現代語訳は「目が止まるはずもない」である。敬語表現の消失により、読者自身も夕霧と同様に紫の上の美しさを垣間見る構図となっている。

さらに、この垣間見場面では紫の上に「ゐ給へる人」「めづらしき人の御さまなり」などの尊敬語が、夕霧に「見たてまつるわが顔にも」という謙譲語が使われている。特に紫の上への尊敬語は、光源氏が女性を垣間見している時に比べ非常に多い。これは、見ている側の夕霧に対し、見られている側の紫の上が上位だからに他ならない。紫の上は夕霧の父である光源氏の正妻格の女性であるから、夕霧が尊敬を向ける対象であることは明白だろう。

最後に、㊦の浮舟巻の垣間見では、「さら／＼と鳴るもつ、まし」、「対の御方にいとようおぼえたり」などで敬語が消失している。前者は「つつまし」が形容詞シク活用 of 終止形のため、「さらさらと鳴るのが気が引ける」と現代語訳でき、後者は「おぼえたり」の「おぼえ」がヤ行下二段活用自動詞「おぼゆ」連用形、「たり」がラ行変格活用の助動詞の終止形で「対の御方にとてもよく似ていた」と訳される。光源氏や夕霧と同様、匂宮の主観が明確に反映されると言えるだろう。

このように、垣間見での敬語表現の消失は、読者に文章を一人称的に読ませることで、垣間見る側の見たもの、聞いたもの、思ったことなどの感覚をより強く意識させる効果があるのだと考えられる。語り手という登場人物と読者の間の垣根を限りなく薄くして、見ている男性の視点に読者を同化させているのである。

こうした垣間見場面であるが、先に成立した『伊勢物語』や『竹取物語』では、『源氏物語』の垣間見と異なる点が見られる。まず、『伊勢物語』の初段の垣間見場面は以下の通りである。

その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、かいまみてけり。おもほえず、古里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

また、『竹取物語』の垣間見場面は、次の通りである。

世界の男、あてなるも、賤しきも、いかでこのかくや姫を得てしかな、見てしかかと、音に聞きめでて惑ふ。その

あたりの垣にも家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安きいも寝ず、闇の夜にいでても、穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。(一九)

この二つの垣間見には、ある共通点が見出せると私は考える。それは、女はらからとかぐや姫という見られる側である女性の様子の描写がない、という点である。反対に、見ている側である男の様相については細かく描写されている。そのため、地の文は覗き見ている男性の視点からは離れたものになっており、登場人物と読者の視点の同化が起こっていない。これら最初期の物語文学では、垣間見に登場人物の視点を強調する意図は含まれていなかったのだと考えられる。しかし、このような第三者視点での垣間見の描写は、徐々に登場人物の視点からの描写に置き換わっているように思う。

たとえば、『源氏物語』以前の物語文学である『落窪物語』の少将が姫君を垣間見る場面は、以下の通りである。

人少ななる折なれば、心やすしとて、「まづ、かいまみをせさせよ」と宣へば、(中略)添ひ臥したる人あり。君なるべし。白き衣、上につややかなる搔練の張綿なるべし、腰よりしもに引きかけて、側みてあれば、顔は見えず。かしらつき、髪のかかりば、いとをかしげなりと見るほどに、火消えぬ。くちをしと思ほしけれど、つひにはと思しなす。(二二六)

また、『狭衣物語』において、狭衣大將が女二宮を垣間見る場面は、以下の通りである。

(前略)あまた立て重ねられたる几帳どもにつたひつつ壁代の中に入りたちて見たまへば、こなたは宮たちおほしますなるべし、帳の前に二所寄りふしたまへり。(中略)かたはら臥したまへるや二の宮におはすらんと、目とどむれば、御髪のかかりなべてならで、あなをかしと見えたまへり。(一六八)

これらの垣間見場面は、『源氏物語』に登場する垣間見と同様に、「覗いている男性の目に女性がどのように映っているか」という主観的な描写がなされている。私は、この『伊勢物語』や『竹取物語』との描写の違いには、当時の作者たちの描きたいもの、読者に伝えたいものに対する意識の推移が関係していると考ええる。『伊勢物語』や『竹取物語』のような、見ている男性側を外側から見た描写が後に変化していくのは、それだけの描写では作者の描きたいものに届

かなかつたからだと推測できるからである。

当時の恋愛展開を描く物語文学では、見ている男性の心理により迫るようなある程度の一人称性、主観性が求められるようになったからこそ、垣間見場面での描写が変化していったと考えられる。垣間見は「一方的に見る側」と「一方的に見られる側」という立場を生み出す行為だ。そのため、登場人物の見えるものや感覚を強調し、敬語表現の不在による視点の同化を利用して一人称性を高めるには、最適な場面形態と言えるだろう。

#### 四 『源氏物語』の垣間見の役割

『源氏物語』の垣間見において、読者に一人称的な読み方をさせるために語り手から垣間見る男性側へと視点を移動させていることは、前節までで述べた通りだ。そう考えると、垣間見以外の場面の地の文と、光源氏たち男性の視点で描かれる垣間見の文章では、描写される女性像に差異がある可能性があるのではないだろうか。そこで、両者の場面を比較し、『源氏物語』における垣間見がどのような役割を果たしているのかを考察していく。

㊦の若紫巻の垣間見では、光源氏が北山で若紫をどのように見初めたのか、という点が詳しく述べられていた。それでは、垣間見場面以外では、若紫はどのように描き出されているのだろうか。以下は、光源氏が尼君に若紫の後見を申し出る場面である。

「みなおぼつかかなからずうけ給はるものを、ところせうおほし憚らで、思ひ給へ寄るさまことなる心のほどを御覧ぜよ」と聞こえ給へど、いと似げなきことをさも知らでの給とおぼして、心とけたる御いらへもなし。

(若紫巻①一六六)

この文章では、垣間見を通して若紫を覗いた光源氏と、長年生活を共にしている尼君との、若紫の性格的な幼さを可愛らしいものと捉えるか、深刻な問題だと捉えるかという認識の差が伺える。また、以下は尼君の死後、若紫が光源氏と共に暮らすようになる場面である。

君は、おとこ君のおはせずなどしてさうくしき夕暮れなどばかりぞ尼君を恋ひきこえ給て、うち泣きなどし給へど、宮おほことに思ひ出できこえ給はず。もとより見ならひきこえ給はでならひ給へれば、いまはたゞこの後の親をいみじう睦びまつはしきこえ給。ものよりおはすればまづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懐に入りゐて、いさ、か疎くはづかしと思ひたらず。さる方にいみじうらうたきわざなりけり。

(若紫卷①一九七)

垣間見場面が光源氏の視点、先の引用部分が尼君の認識を通した若紫の描写とするなら、これらの場面は敬語を用いつつ、客観的に若紫の心情や態度を描き出していると言えるだろう。

続いて、㊦に関連する末摘花巻における地の文での末摘花の描写を見ていこう。まず、光源氏から手紙を送られた末摘花が、女房たちに返事を勧められる場面である。

かく世にめづらしき御けはひの漏りにほひくるをば、なま女ばらなども笑みまけて、「なを聞こえ給へ」とそ、のかしたてまつれど、あさましようものづつみしたまふ心にて、ひたふるに見も入れ給はぬなりけり。

(末摘花巻①二二四)

この場面では、末摘花が女房たちが呆れてしまうほど内気な性格だということが、手紙を読みさえしていないという事実と共に語られている。また、光源氏との一晚を経た後には、以下のような描写がある。

正身は、御心のうちにはづかしう思ひ給て、けさの御文の暮れぬれど、なか／＼咎とも思ひ分き給はざりけり。

(末摘花巻①二二九)

光源氏との関係を恥ずかしく思うあまり、朝に届くべきである手紙が夜まで届かなかったことを不審がる余裕もない末摘花の姿からは、彼女が恋愛事に関して不得手であり、あまり利口とされる要素を持たない女性であることが分かるだろう。

最後に、㊦に関連する、匂宮が垣間見た女性・浮舟について地の文で語られている場面を見ていく。まず例にあげたのは、東屋巻の文章だ。

かたちも心ざまも、えにくむまじうらうたげなり。ものはぢもおどろ／＼しからず、さまよう子めいたる物からか

どなからず、近くさぶらふ人々にも、いとよく隠れてゐたまへり。物など言ひたるも、むかしの人の御さまにあやしきまでおぼえたてまつりてぞあるや、かの人形求め給人に見せたてまつらばやと、うち思出で給おりしも、「大將殿まいり給」と人間こゆれば、例の御き丁ひきつくるひて心づかひす。  
(東屋卷(一)一四七)

先に引用した若紫への尼君の印象と同じように、浮舟の母である北の方の浮舟への印象や評価が、北の方の考えを通じて描かれている。また、浮舟の心理が垣間見える部分も存在する。

女、いかで見えたてまつらむとすらんと、空さへはづかしくおそろしきに、あながちなりし人の御ありさまうち思出らるゝに、又この人に見えたてまつらむを思やるなんいみじう心うき。  
(浮舟卷(五)二一〇六)

この場面では、匂宮と関係を持ってしまひ薫に合わせる顔がないと嘆き、板挟みの恋に苦しむがゆえに後に入水を選ぶ浮舟の後悔や自己嫌悪のようなものが、はっきりと地の文で描かれている。

このように、若紫と末摘花、そして浮舟の垣間見場面以外の描写を抜き出してみると、彼女たちの内面に関する描写が多く補完されていることが分かる。尼君や女房、北の方などの女性に近しい者たちの考えを反映させながら、その女性がどのような性格や気質を持っているのかを、より具体的に描き出しているのである。しかし、女性の容姿に関する描写は、垣間見場面ほど詳しくはない。

垣間見場面では、たびたび見られる敬語表現の消失を通し、覗き見る男性側の一人称的な視点に読者を同化させることで、登場人物の視点を強調している。これはつまり、男性側が視覚や聴覚などから受ける女性の印象を読者と共有させるということである。男性が垣間見を通し、その女性をどのように捉え、何を感じ何を思うか。垣間見場面はそのような女性に対する男性の印象を読者に伝えることに特化していると言えるだろう。一方で、垣間見場面以外で描かれる女性は、より内面的な部分を強調されている。これは男性の視点を強調した垣間見ではほとんど語ることができない部分である。垣間見で覗き見ることができるのは、女性の外見的特徴や印象といった最も表面的なものであり、本来その女性が持つ性質を完璧に窺い知ることは不可能なのである。垣間見以外の地の文で描かれる女性は、語り手により、または女房など普段の女性に近い存在からどう見られているかという作中人物の思考を介して、客観的に表現されている。

る。

これらの差異から読み取れるのは、垣間見はあくまでも「きっかけ」に過ぎないということである。垣間見だけでは、男性は女性の本質的な内面に踏み込むには至らない。多くの垣間見で重視されるのは外見や印象であり、その第一印象をきっかけとして、男性は女性と恋愛関係を持ち、関わり合う過程で本質的な部分を知っていく。そのため、垣間見において重要なのは、男女が互いの内面にまで踏み込み、恋物語を展開していくためのきっかけになることなのだとは考える。それゆえに、垣間見の描写は男性側の視点と男性から見える女性の姿に偏り、女性のより本質的な人間性を読者に読み取らせるには至らないのである。一節において私は垣間見を「読者が恋物語を予期する伏線」と結論づけたが、それと同時に、登場人物にとっては恋愛展開をはじめきっかけの一つとなるよう、意図して物語上に配置されているのだと考える。

また、垣間見は女性の表層を見つめることに特化した場面であるが、同時に覗き見る男性側の心理に最も密着した場面であるという解釈もできるのではないだろうか。垣間見における敬語表現の消失は、読者に登場人物の視点を共有させる効果があるのだから、ここに描かれるのは語り手を通さない、垣間見る男性の感覚に寄り添ったものであるはずだ。それはつまり、男性の内面の考えや感覚が、最も直接的に読者に伝わる場面と言えると私は考える。垣間見場面は、女性の表層的な面を描くと共に、それを見ている男性の感覚を主観的に描写することで、男性の内心に密接に迫っているのである。

このように、『源氏物語』の垣間見場面は、敬語表現を消失させ読者と登場人物の視点を同化することで、女性の表層と男性の恋愛に関する本質部分を明確に描いているという特徴がある。これは、当時の貴族間の恋愛において一般的に重要視されたのが、家柄や教養という個人の本质ではない表層的な面だったからではないかと私は考える。だからこそ、垣間見という女性の表層を覗き見る風習は恋愛の契機となり、物語上でも、見ている男性や読者に恋愛展開を意識させる役割が求められたのだと考える。

おわりに

垣間見は、平安当時の恋愛に関する風習として、当たり前のように物語上に登場する行為である。しかし、その描かれ方には、風習としての行為を越え、作者が読者に「どう読んでもらうか」を意識した、たくさん意図が込められている。『源氏物語』のように多数の恋愛を取り扱う作品であれば、それはより顕著な特徴として表れていると言えるだろう。垣間見は恋物語のきっかけ・伏線としての明確な機能を持つて物語に組み込まれている。そのような意図と、その意図を成り立たせる手法によって、『源氏物語』における垣間見は、様式として確立しているのである。

注 『源氏物語』の本文は、柳井滋ほか『新日本古典文学大系源氏物語』（岩波書店・一九九七年）により、引用部の末尾に巻名、巻数とページ数を漢数字で記した。その他の作品の本文の引用は以下により、引用部の末尾にページ数を漢数字で記した。『伊勢物語』↓渡辺実『新潮日本古典集成伊勢物語』（新潮社・一九七六年）、『竹取物語』↓片桐洋一ほか『新編古典文学全集竹取物語伊勢物語大和物語平中物語』（小学館・一九九四年）、『落窪物語』↓稲賀敬二『新潮日本古典集成落窪物語』（新潮社・一九七七年）、『狭衣物語』↓小町谷照彦ほか『新編日本古典文学全集狭衣物語①』（小学館・一九九九年）  
倉田実「垣間見の様式」『国文学解釈と鑑賞別冊源氏物語の鑑賞と基礎知識若紫』（至文堂・一九九九年）については『鑑賞と基礎知識』と略し、注記を省略した。

- (1) 三谷邦明「語り」と〈言説〉——〈垣間見〉の文学史あるいは混沌を増殖する言説分析の可能性——『源氏物語の言説』（翰林書房・二〇〇二年）
- (2) 前掲注1に同じ
- (3) 吉海直人「若紫巻の「垣間見」」「垣間見」る源氏物語——紫式部の手法を解析する——（笠間書院・二〇〇八年）
- (4) 前掲注1に同じ

- (5) 前掲注1に同じ
- (6) 島津久基『對譯源氏物語講話』二(矢島書房・一九三六年)
- (7) 向井克胤「源氏物語における垣間見描写の視点―若紫の巻北山山荘における」『国文学解釈と教材の研究』一〇―一三(一九六五年一月)
- (8) 前掲注1に同じ
- (9) 石坂晶子「藤壺の反証―垣間見の発動力」『源氏物語における思惟と身体』(翰林書房・二〇〇四年、初出一九九九年)